

天安門事件一周年を迎える中国

中 嶋 嶺 雄

(東京外国語大学教授)

本稿は三月二十六日、中嶋嶺雄氏が本誌編集部求めに応じて、最近の中国情勢、とりわけ天安門事件一周年を前にしての鄧小平復活問題に真正面からスポットを当てて論じられたところを、文章にまとめたものです。なお本文中の見出しは編集部がつけました。編集部

鄧小平復活問題のヤマ場

中国の人びとが、今かたずをのんで見まもっているのは、天安門事件一周年、つまり昨年清明節に起こった天安門前広場の『大衆反乱』から一年たった今日、党中央指導部がこの事件をどのような形で位置づけるのか、という問題だと思えます。それと同時に、この天安門事件の首謀者として、「反革命陰謀事件」の首謀者として、党内外のすべての公職を奪われた鄧小平が、はたして再び復活するのかどうかという問題だと思えます。

この問題は中国のすべての人びとが注目しているところだと思えますが、考えてみますと、鄧小平の復活がささやかれ月十八日の『人民日報』に袁学亥ほか三名による共同論文があるのですが、その中で一九四六、七年の抗日戦争直後の中国内戦期での劉伯承・鄧小平部隊の活躍を高く評価し、このような形で鄧小平の名が公式に復活しているわけです。それから、最近手もとに届いた毛沢東の葬儀をめぐる公式報道、これは御承知のように「四人組」のいる写真はすべて抹殺・修整されているのですが、それらの一連の毛沢東葬儀前後の報道から鄧小平批判の部分が削除されている。こういうふうにもかわらず、依然として彼は出てこないわけでありませう。

この問題については一般に二つの見方があるようです。一つは、鄧小平の自己批判が行われて、その自己批判をめぐって内部的にまだ問題が残っている。同時にこの鄧小平の自己批判とともに毛沢東の指示——これは去年四月七日の天安門事件のあとに党中央の会議が、毛沢東の提案にもとづいて決定を行っているわけですから——、それをどういふふうにか処理するかという問題をめぐって調整がついていない。しかしながら、これらはまもなく調整がついて鄧小平が近く復活するであろう、という見方が一つあるわけですね。それから二つには、そういう状況の中で華国鋒自身が鄧小平の復活をサポートし、まもなく華国鋒—鄧小平体制という新たな集団指導型の体制が車の両輪のようにできるのではないか、そのために万全を期しているんだ、という見方があるわけですね。

ていながらなかなかそれが実現しないという状況が、もうすでに三ヶ月以上続いているわけです。しかも、たんに北京からの情報や外電がそのようなことをささやいているというだけではなくて、たとえば廖承志氏をはじめとする中国の当局者と思われる人たちも、鄧小平の復活が間近のことをしばしば語っているわけで、にもかかわらず鄧小平の復活がなかなか実現しない。そうであるだけに、鄧小平が急転直下「反革命分子」として追放されていたこの天安門事件一周年は、この事件の再評価問題とともに鄧小平問題の一つの注目すべきヤマ場になるといわざるを得ないわけです。

それでは一体、鄧小平はなぜ、復活しそうで復活しないのか。この問題で、もっとも新しいニュースとしては、さるこれらの見方への一つの解答が、天安門事件一周年を迎えて出ると思いますが、こうした見方は、たとえば毛沢東死後の中国は集団指導体制へ移行するであろうというようなことがこれまでの中国共産党内部での党内闘争の現実および中国のある種の政治文化の特質といったものをまったく無視してさかんに言われたのですが、実はそれと同じように、事態の本質を何らつかんでいない見方だと思えます。(なお、念のために申しそえますと、私はこれまで中国内部の政治的角逐を「権力闘争」と呼んだことは一度もありません。それは「権力闘争」という用語が不適當であるからではなく、政治学上も「権力闘争」を含まない党内闘争などあり得ないからであります。)

華国鋒と鄧小平——その矛盾する関係

そこで、私自身のこの問題に対する見方を述べてみたいと思うのですが、その前に前提的に確認しておかねばならないことは、実は鄧小平の立場と華国鋒の立場との関係は、まさに正と反との関係、そういう矛盾した関係にあるということです。このことが一般にほとんど無視されているところなのです。しかしながら、これは非常に重要な問題点でありまして、ざっと過去一年の政治のプロセスを振り返ってみますと、よく知られているように、昨年一月八日に周恩来総理が亡くなりました。そして一月十五日に鄧小平が弔辞を讀

んだわけですね。このときは、内外とも、鄧小平が周恩来の後継者であろうと認めていた時期であって、まさにそうであるがゆえに、鄧小平が人民を代表して弔辞を読んだのですが、この鄧小平の弔辞は非常に明確な路線を提起していた、すなわち、「四つの現代化」を中心とするいわゆる周恩来路線の継承を誓っていたと解釈できる弔辞でした。その点ではいかにも鄧小平らしい非常に挑発的な弔辞でありますけれども、そのことにいらだった当時のいわゆる文革派のリーダーたちは、いっせいに鄧小平批判に向かって行くわけです。そして一月下旬から二月初旬にかけて開かれたと思われる党中央の会議で、鄧小平の総理昇格を阻止した。それにかわって出てきたのが華国鋒であったわけですね。そして、二月七日に、清華大学では「走資派」批判という形での新しいキャンペーンの火ぶたが切って落とされました。そしてその翌日、華国鋒の総理代行という人事が報じられ、世界はびっくりしたわけです。当時すでに華国鋒は、六五年一月の第四期人民代表大会で公安部長兼副総理ではあったのですけれども、その中からこともあろうに華国鋒が総理代行という形でクロージアップされたことに、世界は驚いた。しかしながら、この経過が明らかに示しているように、華国鋒が総理代行として出現したのは、まさに「走資派」批判の開幕と時を同じくしていた。つまり鄧小平を批判する形で華国鋒がクロージアップされたということでもあります。

う事実の確認が、この問題の前提であります。こういふ状況を考えてみますと、そもそも鄧小平と華国鋒が車の両輪のようにスクラムを組むとかいった、そういう安易な関係ではないのでありまして、このことを示唆しているのが、一月二十一日に北京で政治局会議が開かれたらしいという、AFP二月六日付の電報であります。北京発AFP電報が、かなり信頼性の高い情報をこの間送ってきていることについては、昨秋の北京政変で明らかでありましたけれども、この会議では葉劍英が鄧小平の過去の職務への復位を要求し、政治局全体にそのことを勧告したけれども、全体がまともならず、したがってこの問題は、いま中央委員レベルにおろされて論議されている、というような電報だったと思えます。これは、当時の周恩来一周忌をめぐる中国民衆の民意の傾き、それから華国鋒政権そのものが政治的組織的に何らかの認知を得なければいけないという状況からしても、この政治局会議が開かれたらしいことは十分うなづけるわけですが、この問題が明らかになっているように、実は今日の鄧小平問題というのは、たんに鄧小平の復活の態様如何、その時期如何という問題だけではなしに、鄧小平問題が、華国鋒体制そのもののレジテマシーニ正統性と非常に密接な関係にあるということでありまして、北京政変を承認させるには、同時に、鄧小平問題に華国鋒政権が何らかの決着をつけなければいけない。そのことを抜きに華国鋒体制は中央委員会での承

そうした中で「走資派」批判のキャンペーンが進んだかに思われたのでありますけれども、そのことが同時に、たんに鄧小平のみならず周恩来その人への批判を含むことに焦慮した中国の民衆は、はじめて自覚的な政治参加を行った。まさにその意味では、いつも官製的に動員される五十万、百万の大衆とはちがった自覚的な政治参加が行われた。したがって自分の将来の運命をそこに賭ける形で集まったのが、あの清明節の大衆だったと思います。そのときに周恩来を追慕し、同時に、この周恩来の路線の実行者としての鄧小平を歓迎する大衆の意志表示があった。まさに「造反有理」であり、中国近現代史上に特筆すべき天安門事件の歴史的意味とその詳細については、私の「再構成天安門事件」(『中央公論』一九七六年九月号)を参照していただきたいのですが、この現実に驚いた党中央は四月七日に会議を開いて、最近の鄧小平の言動を天安門事件との関連で討議し、「毛主席の提案にもとづいて」という形で、鄧小平の党内外のあらゆる公職を剝奪しました。だが同時にこのときにはもう一つの決議がありまして、その決議は華国鋒を党第一副主席兼國務院総理にするというものであり、この時点で最終的に華国鋒をクロージアップさせたわけでもあります。再び、華国鋒の決定的な台頭が鄧小平を足げにする形で行われた。これらの経緯が明らかにしているように、まさに華国鋒の政治的な台頭は、鄧小平を足げにして鄧小平を犠牲にする形で実現してきたとい

認を求めることができないという、そういう重大問題として存在しているのだと、私は考えるわけであります。

余裕をもつ鄧小平:

以上のような前提を、つぎに鄧小平の側、いわば旧「実権派」「走資派」の立場からみてみたいと思えます。

いうまでもないことですが、「実権派」とか「走資派」という言葉は、政治的敵対者が与えているレッテルでありまして、当の中国民衆は、鄧小平が「資本主義の道を歩むブルジョアの实権派」だとは考えていない。このことは、周恩来なしに鄧小平に対する民衆の支持が非常に根強いこと、しばしば壁新聞は民衆の声として鄧小平の復権を要求していることによっても明らかですが、こういう状況の中で、鄧小平の側からみると、すでに路線的には周恩来—鄧小平路線が勝利している。つまり、昨年の天安門事件のときに、「四つの現代化なりしかあつきには、宴を設けて酒をくみかわそう」とうたった人びと、「逆賊」と批判され、鎮圧された「反革命分子」たちの掲げた「四つの現代化」路線は、もはや現実のものとなつていくわけでありませう。

そういう、いわば路線的にはすでに勝利している状況の中で、鄧小平の側はむしろ非常に有利な立場にある。しかも、「走資派」批判のキャンペーンにもかかわらず、「走資派」は崩れなかった。そして評価が逆転しました。のみならず、

これは非常に根本的な問題だと思うのですが、十年間にもわたるあれほどの文化大革命にもかかわらず、「実権派」そのものが崩れてはいないのだという現実を確認せざるを得ないような状況が、いろいろ出て来ているように思います。それは、たんにこの間「走資派」として批判された人たちが再びクローズアップされてきているということだけではなくて、現在の中国の党・政・軍を見ておきますと、上級幹部はもとより中堅・下級幹部の中に旧「実権派」の復活が依然として相ついでいるわけであります。

その中でもっとも象徴的な出来事は、かつて文化大革命の時期に北京の彭真、吳晗ら例の北京市委員会とともに、もう一方の「実権派」の拠点であり、当面はまさに彼らを打倒することに於いて上海グループ「四人組」が台頭してきた、その対象であった上海のリーダーたち、曹荻秋および陳丕顯という人たちですが、とくにこの中で上海市委員会第一書記として、実質的には上海市長の曹荻秋以上の地位にあり、上海の最高指導者であった陳丕顯が、この二月の中旬に雲南省革命委員会副主任という形で、ポジションとしては大分目立たないところではありますけれども、ともかくあの陳丕顯が復活してきているということであります。私自身、当時上海を訪れまして、私が泊っていた和平飯店のわきの南京路には、路上に大きく陳丕顯批判の文字が書き連ねられ、そしていたる所に陳丕顯・曹荻秋批判の壁新聞が張ってあったこ

とを思い浮かべるのですが、まさにあの彭真とともに、もっとも有力であった「実権派」の陳丕顯が、こともあろうに今日に至って復活しているということは、結局まわりまわって、文化大革命の十年間にもかかわらず、たんに「走資派」が生きているのみならず、「実権派」の基盤が崩れていなくなったことを意味するのではないか。それほどまでに文化大革命というものは、いわば政治の表層をかすめていった「疾風怒濤」ではありましたが、中国の社会そのものを変革することができなかった、まさに大いなる虚妄であったという気がするわけであります。

こういう背景があるだけに、鄧小平の側からすれば、状況は時がたつにつれて有利である。それに鄧小平自身は、周恩来とともに、ある意味で国家的な使命感に立脚している政治家でありますので、必ずしも自己のポジションにこだわる必要はないような気がします。そうであるだけに、もし復活するならば、非常にいい条件のもとで今度こそは万全の態勢で復活したいというふうに考えるでしょうし、逆に、そうたやすく復活してやるものかという、それほどの余裕を、実は鄧小平の側は持っていないかと思えます。

華国鋒体制のもつ弱点

この鄧小平の有利さは、それに反批判する形で華国鋒体制の側の不利・危険な状況を意味しているわけであります。そ

もそも、あれほどの激動がありながら、あれほどの中国政治の変化が起きながら、六ヶ月を経過しようとしているのに党中央委員会さえ開き得ない。たとえば政治局全体をとってみましても、半数以上が欠けたままである。最高政策決定機関としての政治局常務委員会をとると、九人のうち二人しか残っていない。華国鋒と葉劍英だけであります。こういう、まさに政策決定機能がほとんどマヒしているような党中央。そういう状況の中で人事的な補填もしなければならぬし、また何よりもあの政変を意味づけ理論づけなければならぬのですけれども、この肝腎なことを未だに成し得ないでいる。つまり、華国鋒主席は何らの制度的・組織的承認をも得ていない。いわば、自作自演のクーデターを行って自分が正しいのだとさかんに宣伝し、相手が悪いのだとさかんに批判しているのにすぎない状況が、依然として継続しているわけであります。華国鋒の側としては北京政変を行ったことの正しさという意味での自己の正当性と、レジテマシーという意味での正統性という、この両者においてやはり欠けるところがある。それゆえになかなか会議を開けない、開いた場合には北京政変の追認のみならず、鄧小平問題に対して華国鋒自身の立場を明らかにしなければならぬという状況にあるわけであり、こういう中で、華国鋒体制はみずからの政治的不安定を露呈しつつあるわけであります。

最近の、遅れて来た『中国画報』あるいは『人民中国』は、

あの毛沢東葬儀の中から「四人組」を完全に写真の上で抹殺しております。つまりそのような形で修整をせざるを得ない。誰の目にも明らかに残っている映像を、あのようない修整し、つまり歴史を偽造し事実を歪曲してまでも自己の正統性（正当性）を喧伝しなければいけないというところに、そもそも華国鋒体制の弱さが露呈していると思えます。

それから二番目には、このような華国鋒は、とくに国内建設と中国の対外政策においてみずからイニシヤチブを発揮し得ないということであります。

最近、「農業は大寨に学ぶ会議」とか昨年十一月の敗政問題にかんする会議で、華国鋒が大きな役割を果たしたようなことが言われておりますが、しかしながらこれは全体的にみて、華国鋒自身の経済建設なり外交なりの方針をみずからのイニシヤチブによって提起したというものではなかったわけであります。そのようなリーダーシップ、指導者としての体質にかんして、そうした体質的弱点があればあるほど、華国鋒は、周恩来―鄧小平路線を政策的には採用せざるを得ない。そういう状況が出て来ているわけであります。ここにも、華国鋒の側の弱点があることは言うまでもありません。

こういう弱点を背負っている中で、鄧小平が全世界の注目を集め脚光を浴びて復活するということは、華国鋒にとつて非常にいらだたしい、好ましくないことであろうことは、歴然としています。華国鋒としては、何とんでも、それを一

日延ばしにでも遅らせないという事情があるわけです。つまり鄧小平の側にも「そう簡単に出てやるものか。出るならどういふ条件があるのか？」という、時がたつにつれて、出現のさいの自己の立場を高めようとする状況があるのと同様に、華国鋒の側にはそれを阻止しようとする状況がある。このような複雑な状況こそ、過去三ヶ月間、鄧小平の復活が近そうでありながらなかなか実現しないという問題の大きな背景であろうと思います。

「天に向かって唾を吐く」

こういう状況の中で華国鋒にできることは、みずから毛沢東の継承者であり毛沢東路線の継承者であると言いながら、他方では「四人組」の旧罪暴露をやることしか、実はできない。北京政変の根拠を理論づけることがなかなかできない。したがって「四人組」を口汚ない言葉でののしり、たとえば江青夫人がいかにブルジョア的であったかというようなことをしきりに宣伝するわけですけれども、そのことは、それをやればやるほど実は亡き毛沢東主席を冒瀆していることになるし、毛沢東の権威を引きずり下ろしていることであって、いずれ「天に向かって唾を吐く」ような事態にならざるを得ないのであります。何と云っても、毛沢東が過去四十年近く江青夫人を最愛の妻として、のみならず政治局員として引き立てて来たことは、事実として抹殺できないことであるし、

下手人としては華国鋒はたしかに偉かったかもしれないけれども、それ以上のもではないということのみずから表明してしまうような結果を生み出しているような気がします。知的・道徳的ヘゲモニーの欠如という問題ですね。

この問題との関連でみますと、最近北京衛戍区八三四一部隊のリーダーであり、いわば公安関係の重鎮であった汪東興が、そのポストを離れたのではないか、そして紀登奎がそれに代わっているのではないか、との情報があります。やはり政変の大きなカギを握っていた人物というのは、やがて、そこに密着しすぎていたがゆえに、そこから離脱せざるを得ないというのが、政治社会の一つの一般法則でありますけれども、そのようなことを反映してか、八三四一部隊のリーダー汪東興が下ろされたのではないかということが言われています。だとすればなおさら、このことは華国鋒にとっては、いわば自分とともに文革派から「寝返った」仲間、自分の部下が、もぎ取られたような形になるわけで、その意味でもこれは注目すべき情報だと思います。

北京政変に内在するジレンマ

さて、華国鋒の最も重要な自己矛盾は、昨年の天安門事件のときの華国鋒の立場であります。天安門事件のさいに、さきほどの中共中央の四月七日付決議に明らかなように、鄧小平を失脚させておいて華国鋒は党第一副主席兼総理になった

そして華国鋒自身もそういう上海グループに率いられて歩み、そして湖南省の文革のリーダーになったわけですから、そういういわば自己矛盾を、中国民衆はいずれ気付いていくことになるわけです。

次には、最近目立っている華国鋒個人崇拜であります。これは最近いたる所に華国鋒の写真が出、場合によっては華国鋒の写真の方が毛沢東の写真よりも高く掲げられているようなことが多いわけでありませうけれども、こういういわば権力継承の非常に前近代的なパターンを、なぜ踏襲しなければならぬのかということが問題でありまして、それが同時に華国鋒体制の不安定性を示しているわけでありませう。最近の注目すべきものに、毛沢東の書と華国鋒の書を並べたものが、あちこちに出ております。しかも、あの達筆な毛沢東の書にくらべて、華国鋒の筆跡はいかにも粗野で品がなく、何とも言えない悪筆で、あの文字の国の中国民衆、書に対してあれほど敏感な中国民衆が、このように下手な字を書く華国鋒を自分たちのリーダーとして仰ぐことができるかどうかという問題を、ただちに痛感せざるを得ないわけでありませう。その辺の事情を鄧小平は意識しているのかもしれないけれども、実はそのことに華国鋒自身は気付いていないだろうと思ふんですね。ここに『北京週報』の11号がありますが、この毛沢東と華国鋒の書を見ると、歴然とするでしょう。いかに、大衆から浮き上がっていた「四人組」を逮捕するその

わけですが、このときは、「偉大な領袖毛主席の提案にもとづいて」という形で中共中央が決議しているわけです。これについては、病床にあった毛主席の提案を伝達したのは「四人組」の一味であった毛遠新（瀋陽軍区政治委員）であるから、毛主席の提案そのものが歪められて伝わったのだ、毛主席自身は鄧小平を「反革命分子」として処断する気はなかったんだ、というような解釈が流布されておりますけれども、これは非常に苦しい、矛盾した解釈であって、実は「偉大な領袖毛主席の提案にもとづく」というまさに同じ形で、華国鋒を第一副主席兼國務院総理にする決議も行っているわけ

です。もしも、毛遠新が歪めた伝達を行ったとするならば、華国鋒がみずから決定的な地位についたこと自身も正されなければいけない。こういう状況があるような気がいたします。そうであるだけに、華国鋒体制にとつての矛盾は、まさに華国鋒が北京政変によって「四人組」を一網打尽にし、その同じ十月七日に、みずから党主席兼中央軍事委員会主席になった、つまり「四人組」を一網打尽にしてはじめて彼自身が最高権力を手にしたという、まさに華国鋒のクーデターであったことが持ついわば必然的な帰結として存在しているのであり、ここに今日のジレンマがあると考えざるを得ないわけでありませう。

しかも、中国社会の方向としては、「四つの現代化」を求め、いわば貧困のニュートピアに代わって豊かな社会主義を求

める声が澎湃として湧き上がって来ている。そして、まさに舞台は、たんに文革否定のみならず、ある意味での「毛沢東思想」の相対化、つまり非毛沢東化の方向へ動きつつある。そういう状況の中で華国鋒は、いわば過渡的な指導者としてのジレンマを日一日とさらけ出しつつあるわけであります。

こういう状況があるだけに、旬日後に迫った天安門事件一周年を党中央はどのような形で迎えるのか、政治局会議の決定をくつがえすのかどうか、『人民日報』にどんな社説が出るのか——去年は天安門事件についても当然社説が出ているわけでありまして、「天安門広場の反革命政治事件」という記事なども出ていたわけでありまして、非常に注目される場所でありまして。

この点で示唆的なのは、二月六日付『人民日報』の短評欄でありまして、目立たない形ではありますけれども、そこには「党中央は決議を行っても決議を絶対化すべきではない。もしもその決議が人民に不利益な場合には取り消してもいいのだ」というようなことを、さりげなく言っているわけでありまして。これはつまり、このような決議取り消しへの伏線をここに敷いているのかもしれない。しかしながら、決議取り消しというようなことになる、まさに今日の中国の政治路線の中で、かつて文化大革命の初期にさかんに言われたように、彭德懷事件の再評価というような「旧判決をくつがえす」問題になるわけでありまして。しかしひとたび「旧判決を

くつがえす」ということになる、一挙にいくつかの判決をくつがえさなければならなくなる。「十大関係論」などが今ごろ出されているように——これは決して華国鋒の立場から出されているのではなくて、周恩来—鄧小平路線の立場からであると思わざるを得ないのですが——そういう意味では、一九五六年段階までの中国へ、論理的には回帰していくという方向が出てくるわけで、それは同時に華国鋒体制にとっても非常に深刻な問題になるような気がいたします。

天安門事件一周年を迎える中国

最後に、これは予側のことですのでわからないのですが、ただ私自身の理論的な帰結からするならば、もしも天安門事件一周年前後に鄧小平が出現するとすると、これは、華国鋒その人にとっても危機でもあるし、鄧小平—華国鋒間の新しい闘争の始まりだと見なければいけない。もしも、この前後に出現しないとするとするならば、問題はわれわれが想像している以上に深刻であって、内部的に深刻な亀裂が複雑にからみあっているものと見なければいけない。だとすると、ここ当分中国は政治体制の確立がむずかしいのではないかという気がするわけでありまして。

一部には華国鋒体制は安定しているという意見もありますけれども、もしも安定しているのならばなぜ党中央委員会さえ開かれないのか。なぜ最近のようにいたるところで再び個

人崇拜をやらなければいけないのか。あのようなやり方で「四人組」の写真を抹殺し修整するというようなことをなぜやらなければならないのか。はやくもいくつかの問題が出て来ているわけでありまして、以上のような状況を見てみると、やはり北京政変という極限状況においてルール違反は華国鋒の側にあったのであり、大局的には「四人組」が指弾されるべきであったにもかかわらず、そのことの手続きをきわめて非正常な形で怠っており、権力を獲得した華国鋒自身が北京政変そのものもつ矛盾に、今後責められるのではないかという気がいたします。しかも、中国社会の内部には、なぜ華国鋒は毛主席の教えを踏襲しなかったのか、毛主席は「闘争—批判—改革」と言ったではないか、「団結—批判—団結」と言ったのではないか、毛主席の霊前で今後を誓い合った人たちが喪も明けないうちにこのような挙に出て相手を一網打尽にすることが毛主席の遺志であったかどうか、という声がある意味での広範な声なき声として潜在しているだけに、華国鋒にとって負担はますます重くなるような気がいたします。

こうしたすべての状況が、鄧小平問題がある意味であいまいな、そして複雑な問題にしている。それだけに鄧小平の再復活は、「毛沢東思想」の位置づけの問題、非毛沢東化の問題にも関連して、今後の政治動向のなかで非常に注目される問題だと私は考えております。

(文責—編集部)

〈追記〉 四月七日現在、鄧小平問題に新しい変化は確認されず、北京では現在重要会議開催中との情報もある。いづれにせよ、鄧小平再復活が天安門事件一周年に実現せず、また天安門事件一周年にならぬの社説や論文も出せず、しかも毛主席逝去後はじめての清明節だということに天安門広場がついに毛主席追悼の場にもならなかったことを考慮すれば、中国内政の矛盾と亀裂は予想以上に深刻であるような気がする。

(中嶋嶺雄)

中国研究

天安門事件から一年

81

1977. 5月号

- | | |
|----------------|------|
| 毛沢東の過渡期階級闘争論批判 | 高橋勇治 |
| 天安門事件一周年を迎える中国 | 中嶋嶺雄 |
| 竹内好氏をいたむ | 丸山 昇 |
| 中国外交の転換と毛沢東 | 渡辺俊彦 |
| 「文革」前後の北京大学にて | 伏見和郎 |
| 大寨田の土壌について | 近藤鳴雄 |